
《論 文》

ブリザードは起きるのか？
——Mark Strand の *Blizzard of One* ——

中 村 敦 志

要 約

マーク・ストランドの新詩集、*Blizzard of One* (1998) は、どのような特徴があるのか。そのタイトルは何を表すのか。果たしてブリザード（猛吹雪）は起きるのだろうか。これらの点を念頭に置きながら、4つの視点から考察する。まずは、消滅を扱った2篇、“A Piece of the Storm”と“The Night, The Porch”を考察する。2番目に、“Precious Little”を例に、詩集に頻出する風について考える。3番目には、詩人の問題を扱った3篇、“The Disquieting Muses”, “The Great Poet Returns”, “Five Dogs”を取り上げる。そして最後に、日没を描いた2篇、“The Next Time” 第三部と“The View”について考えてみる。その結果、以下のように結論付ける。この詩集の世界で、嵐や吹雪が実際に起きることはない。だが、起きるかもしれないという不安が、絶えず付きまとう。例えば、強風にもなり得る風が、詩の中で頻繁に吹いている。それは今すぐ起こる猛吹雪ではないにしろ、近い将来に起こり得る、とストランドは言っているようだ。つまり、*Blizzard of One* の世界そのものが、そんなブリザードの前兆となっているのである。

キーワード：消滅、風、闇、日没、詩人

序

現代アメリカ詩人の一人 Mark Strand (1934-) は、1998年に *Blizzard of One: Poems* という名の詩集を発表した。直訳すれば『一つの猛吹雪』といったところだろう。一体このタイトルは、何を表すのだろうか。ごく普通に考えれば、詩集全体のテーマや特徴を言い表している、ということになるだろう。だがこの *Blizzard of One* という題名だけで、詩集の内容を想像するのは、容易ではない。珍しい表現であるのに加え、意味が捉え難いからだ。

実は、詩集の中程にある小品“A Piece of the Storm”で、ストランドは一度だけこのフレーズを使っている。それも何気なく。“A snowflake, a blizzard of one, weightless, entered your room / And made its way to the arm of the chair” というように。¹ 一片の雪がふわふわと部屋の中に入って来た。この雪の一片のことを、ストランドは一つのブリザード（猛吹雪）だと言っている。いすに座って本を読んでいたあなたは、そのほんの小さな雪の一片に気付き、本から目を離す。そして、雪片がひじかけに着地する瞬間を見た。それは、「厳粛なる覚醒に過

ぎない」(No more than a solemn waking) と、語り手は多少オーバーな表現を使っている。だが、それが何の変哲もない些細な出来事だということも十分に知っている (That's all / There was to it)。単にこれだけのことだと、謙虚に述べている。

ささやかな詩だ。ストランド特有のひねりとかアイロニーは見られない。単に “a blizzard of one” というフレーズが気に入って、タイトルに使っただけではないかと思えるほどだ。あるいは、読者に好奇心を起こさせるようなタイトルに、わざとしたのかもしれない。一体このフレーズ、そして詩集のタイトルに、どのような意味があるというのだろうか。

マーク・ストランドは、アメリカ詩壇ですでにある程度の地位と評価を得ている詩人だ。1990年から1991年までの2年間は、アメリカ桂冠詩人 (Poet Laureate of the United States) を務めている。その彼が64歳になって新たに発表した詩集、*Blizzard of One* は、翌1999年にピューリッツァ賞を受賞した。現代アメリカ詩の一翼を担っている現役詩人の一人である。そのストランドの最近の詩風とは、いかなるものなのか。² 詩集の特徴を表すと思われる数篇の詩と関連させて、考察を深めて行くことにする。

まずは、上述した “A Piece of the Storm” を糸口に考え始めたい。そして同じように、消滅というテーマを扱った “The Night, The Porch” (10) へと論を進める。次に、“Precious Little” (11) を例に取り上げて、この詩集に頻出する風について考える。さらに詩人の問題について、“The Disquieting Muses” (29), “The Great Poet Returns” (12), “Five Dogs” (35-39) の3篇を考察する。そして最後に、日没を扱った2篇、“The Next Time” 第三部 (9) と “The View” (55) について考えてみる。

1. 消滅

“A Piece of the Storm” の中で、“a blizzard of one” というフレーズは、どのような意味で使われているのだろうか。もう一度、文脈を確認してみよう。丸屋根の「影から／一片の雪が」降ってきて、「あなたの部屋に入った」(From the shadow of domes in the city of domes, / A snowflake, a blizzard of one, weightless, entered your room)。たまたま部屋に舞い込んできた一片の雪。ここからストランドは吹雪を予感し、それが詩のタイトルに表れている。しかもただの吹雪ではなく、一つの(小さい)猛吹雪(a blizzard of one)だと言う。珍しい表現だ。タイトルの “A Piece of the Storm” と考え合わせると、“a piece of the blizzard” が連想される。いすに座って本を読んでいたあなたは、視界に入って来た雪の一片に気付き、本から目を離す。見上げると、雪片が「いすのひじかけ」(the arm of the chair) に舞い降りて来て、着地する瞬間が目に入る (you, looking up / From your book, saw it the moment it landed)。

そして着地した瞬間に、雪片が消え去る命の「短さ」(brevity) を感じ取る。それを「厳粛な覚醒」(a solemn waking) だと言う。一片の雪の消滅を死と捉え、ひっそりとした「花のない葬式」(a flowerless funeral) のようだと感じ取る。献花はなく、もちろん参列者もない。

気付いているのは、あなたと私だけ。Deborah Garrison は、ここでの雪の捉え方について、Wallace Stevens との類似を指摘する。Stevens の詩、“The Snow Man” 中の「存在する無」(the nothing that is) という考え方が、ストランドの雪の捉え方と類似すると言う (Garrison 30)。「存在する無」というのは、確かにストランド詩の重要なテーマの一つだ。だが果たして、この“A Piece of the Storm”にも、そのまま当てはまるのだろうか。一片の雪が消滅するのを目撃する。そこから雪のはかない命について思う。それが「不在」といったテーマにまで及んでいる、とは言い難いだろう。この詩では、舞い降りて来た一片の雪のはかない命の終わり (funeral) が描かれている。雪片は、ひよっとしたら吹雪にもなり得るかもしれない。遠く彼方では今吹雪いていて、その延長線上でこの一片の雪が舞い降りてきたのかもしれないからだ。それが目の前で消え、「無」に帰した (turned into nothing)。それをたまたま目にして、雪の消滅について思う。だがそれが、「存在する無」といったテーマにまで言い及んでいると、この詩では言い難い。雪がすぐに消えてしまう様子を見て、存在の不確かさについて思いを馳せる。この辺りで詩は終わっているからだ。

詩のタイトル“A Piece of the Storm”は、見る者の心に生じた揺れを表す。多くの場合は見過ごされてしまう、何の変哲もない些細なこと。たとえ偶然にしろ、そんな雪の一片に気付き、ブリザード (猛吹雪) を予感する。同時にまた、雪片が消えて行く一瞬に、はかなさを感じて心が揺れる。些細なことだが、そのように感じることでできた心の衝撃を、ストランドは“this piece of the storm”と敢えて言いたかったのではないか、と思われる。

類似したテーマを扱った別の詩では、どうなっているのだろうか。“The Night, The Porch” (10) のテーマは、存在が消滅して「無」に帰すること。時間は夜。家のポーチに一人である。夜の闇をじっと見つめるが、何も見えない。それを「何も見つめないこと」(To stare at nothing) だと言う。じっと見つめるとは、普通は何かに焦点を集中させて見ること。何かを見ないことではない。前述の Wallace Stevens が使うように、「存在する無」を見るという含みはある。その場合、正確には“the nothing”となるはずだが、あいまいなままだ。

ここで、私たちはまるでゴミか塵のような存在として描かれる。「私たち全員が[どこか隅っこに]掃き寄せられるだろう」(all of us will be swept into) という表現には、私たちの存在が消滅し、ゴミ屑のように不要な存在になってしまうという含みがある。まるで、薄汚れて不要となったゴミのように、私たちも扱われるだろう。そのことを今改めて「理解して記憶する」(learn by heart)。そうしないと、すぐに忘れてしまう。だから、意図的に無を見つめることで、思い出す。

ポーチは闇で包まれ、どこからか風が吹いている。普段、人前で着けている仮面を脱ぎ、本当の自分を風に対してさらけ出す。さらけ出す相手が人間ではなく、風である所に、語り手の疎外感が表れている。「風に向かって自己を露わにすることは、すぐ近くにあつて掴めない物を感じる」(baring oneself / To the wind is feeling the ungraspable somewhere close by)。

掴みたいが掴めない、不確かな物。風に向かって本当の自分をさらけ出しさえすれば、その不確かな存在を感じ取ることができるという。

木は、風に揺さぶられるままではない。自らの意志で、風に身を任せて揺れることができる。と同時にまた、自らの意志で静寂を保つこともできる (Trees can sway or be still)。ゴミのように吹き飛ばされ、なすがままにされている私たち人間とは異なる。木だけではない。「昼も夜も、自ら望む状態になることができる」 (Day or night can be what they wish)。単に流れ去るだけの時間に、身を任せているだけではない。昼には昼の希望する時間があり、夜もそうだ。

時間に流されて行くだけの私たちにも、望みがある。ここで言っている願望とは、人間の本質的な存在に関わること。「少なくとも、自分自身にとって未知なる存在でいることの心地良さ」 (the comfort / Of being strangers, at least to ourselves)。型通りでいつも変わらぬままの自己でいるのではない。常に新しい自己を発見し、変化し、脱皮して行こうとする前向きな姿勢がある。型にはまらないための自己改革だ。「少なくとも自分自身には」という点が気になる。他の人からは、いつもと変わらない人間に見えるかもしれない。しかしそれは外面的なこと。内面的には「自己にとって見知らぬ人」でいたい。それが「私たちの願い」 (What we desire) なのだ。

だから今でも私たちは待っているのだ、「出現が消滅となるだろうものを」 (something whose appearance would be its vanishing)。ストランド特有の矛盾した表現。「出現」が「消滅」である、とはどういうことか。対立するはずの概念が結ばれ、イコールに近づく。無から出現して、そして消えて行くという。詩の結末部は、情景描写に戻って、再び夜のポーチ。冒頭では、風が吹いていた。それを受けて、ここでは木の葉の落ちる音が聞こえる。枚数は正確に数えた訳ではない。夜なのでそこまでは見えない。葉が落ちる音から推察して、「言ってみれば2, 3枚か1枚だけ、もしくはそれ以下」 (The sound, say, of a few leaves falling, or just one leaf, / Or less)。となると0枚の葉が落ちる音。つまり、無の音ということだ。葉が落ちるという現象が生じたために、音となって聞こえる。しかし落葉とは、生命が終わって消え行くことだ。つまりこれが、「出現が消滅となるだろう何か」の具体例。これを待っているのだ。

自然を見つめ、自己と向き合うことで、新たな発見がある。それは、ある意味で、ストランドが詩を書く姿勢とも言える。ストランドは自然から何かを感じ取り、それを自己表現と絡める。雪の一片や、夜の落ち葉から、存在の消滅や無について考える。つまり、自然についての観察は自己発見へと繋がり、それを詩に描く。これは書物から得られる知識ではない (The book out there / Tells us as much, and was never written with us in mind)。感じ取る詩人の感性が必要とされる。だからと言って、ストランドを自然詩人だと呼ぶことはできない。自然は観察対象の一つではある。結局ストランドにとって、個人の内面が主要な関心事。それと関わる周辺に自然や社会がある、という位置付けになる。

2. 風なのか？

“Precious Little” (11) のタイトルは、「貴い小さい」あなたへの呼びかけ、として考えてみる。ここで言う「盲目」(blindness)とは、まだ何も分からず、見えていない状態。無知というより、汚れないこと。盲目であることに気付いていない、そういう盲目のことだ(blindness is blind to itself)。そんな汚れないあなたならば、やがて光の世界が見えるだろう(Then vision will come), と語り手は言う。

あなたは「ドアを開ける」(You open the door that was your shield)。今までは「盾」となっていて、未知なる危険から守ってくれたドア。同時にまたそれは、未知の世界に通じる入り口でもある。閉ざして盾とするか。それとも開けてドアとするか。同じドアでも、臨む態度次第で、役目が全く変わる。

未知の世界へ足を踏み入れた時の不安。それが「渦巻き状の風」(the coils of wind)や、「ぼやけた入れ墨状の光」(blurred tattoos of light)に表れている。初めて目にする光景。妖しい風と光。冷気が肌に触れ(The day feels cold on your skin), 怯えるあなたの不安がさらに高まる。

そのとき思いきって、「道を空けろ」(“Out of my way”)とあなたが二度命じる。そのとたん、怪しげな光景は一変する。「紫色の雷は引き下がり、チューリップは花卉を落とす」(the purple thunder draws back, the tulip drops / Its petals)。それほど意表を突く言葉だったのだ。自らの迷いを断ち切ろうとするかのような決意の表れとも言える命令だ。

この直後、道の障害は消え去り(the path is clear), 展望が開ける。まるで大地の野山を駆け巡り、空を飛び回っているようだ。閉ざされた空間が一気に解放される。その解放感で溢れる。「ロッキー山脈を超え西へ向かう」(You head west over the Great / Divide)。「溪谷」(canyons)を通りぬけ、「無限に続く谷」(an endless valley)へと入る。遠くから冷たい感情的な風が、木をハープ代わりにして演奏を始める(the wind — all ice and feeling — / Invents a tree and a harp, and begins to play)。子供にも分かりそうなお話し。難しい説明はない。「大気の長い楽句」(long phrases of air)が葉を揺すり、旋回させる。「これ以上のものがあるだろうか」(What could be better...?)。自然が奏でる音楽と光景に、聞き惚れる。

だがこのままでは終わらない。クライマックスを迎えたかに思えた瞬間に、詩は急展開を見せる。これほどまでに称賛していた風に、疑問を投げかける。「しかしもう一度よく聞いてごらん」(But listen again), と「貴い小さな」あなたに注意を促す。果たして「本当に風なのだろうか」(Is it really the wind...?)。この光景は永遠に続くとは限らない。ドアを開ける前にあった盲目の世界と、背中合わせなのかもしれない。少しでも油断すれば、元の闇に逆戻りする。そこから逃れるように、暗闇の一步先を走り続ける。一步でも遅れば、闇へと引きずり込まれる。そんな危機が迫った人の足音なのではないか(Or is it the sound of somebody running /

One step ahead of the dark?)。決して楽しい音楽などではなく、切羽詰った状況に追い込まれた、必死の足音。なんと凄まじい切迫した音なのだ。走っている姿は見えない。だが、もしもそれが本当なら、厳しい現実をあなたに知らせることになる。これこそが、盲目を開眼させ、現実の(大人の)世界へ目を向けさせることになるのだ。

「もしそうだとしたら」(if it is)と、断定を避ける。語り手は明確に語らず、仮定の話しとしてはぐらかす。もしそうならば、「盲目でなくなることと、盲目に戻ることに、どんな違いがあるのか」(what is the difference / Between blindness lost and blindness regained?)。盲目のまま、何も知らずにいたほうが幸せだったということもあり得る。現実を知り、その上で敢えて目をつむり、盲目に戻る。ただし、もう以前のままの盲目ではない。小さいあなたには、やがて時期が来れば分かること。それならば、このままそっとしておいて、何も知らぬ期間を少しでも長引かせた方が幸せではないか。

要するに最終行は、無垢の状態を失って知恵の実の存在を知り、現実を見てしまった大人のこと。その後、あえて現実を見ないように目を背け、意図的に盲目を装う。これもまた大人の取る態度。どちらが良いのか。違いはあるのか。「貴い小さい」あなたへのお話しのはずが、結局は大人の現実社会の話しとなってしまう。だから、光の世界で吹くはずの風に、不安の影が付きまとうのだ。

3. 詩人

この詩集には、詩や詩人について扱った作品がいくつかある。例えば、“Two de Chiricos”(「キリコの2作」)と題された連作詩の中に、“The Disquieting Muses”(29)という1篇がある。イタリア画家キリコ(1888-1978)が描いた同名の絵を題材に、ストランドが書いた詩である。³この作品では、詩の女神である2人のミューズが、疲れて果て絶望している(Boredom sets in first, and then despair)。彼女たちは何もすることなく、広場でただぼんやりと佇む(they have no purpose but to pose)。これは何を意味するのか。彼女たちは、詩の心を人々に伝えようと説いて回った。だが徒労に終わり、絶望している。人々の心は乾き、時代が詩を求めないのかもしれない。だがそんな時こそ、本当は詩が必要なのだが。詩の女神は疲れ果てて、自分たちの無力さに絶望している。そんな女神の様子が、見る者を「不安にさせる」(Disquieting)。そういう絵なのだ。

女神の顔は「無表情」(blank)。本来は、詩の源泉とも言える豊かな感性を持ち、様々な感情や感動を人に伝えられるはず。それが疲労と絶望で、すっかり無表情になっている。「この後何が起きるのか、誰も気にしない」(What happens after that, one doesn't care)。この無関心こそが、さらに問題なのだ。絶望した女神の様子を見ても、人々は何も感じない。疑問すら持たない。

この詩とは対照的に、“The Great Poet Returns”(12)では、大詩人が登場する。その登場シー

ンは、劇的なほどにオーバーだ。神かと見間違えるような神々しい登場だ (When the light poured down through a hole in the clouds, / We knew the great poet was going to show)。それほど民から崇められる高貴な存在なのだ。神不在の時代にあって、神の代理を務めているかのようだ。あるいは、現代における大詩人の不在を痛感する余り、大衆が自ら作り上げた虚像に酔いしれている、とも考えられる (When he spoke, the air seemed whitened by imagined cries)。そんなことは百も承知の上で、大衆は酔いしれた振りをしているだけなのかもしれない。

大衆にとって、詩とは果たして何なのか。朗読会の意味とは。聴衆にこの詩人の朗読は伝わっているのか。理解できるのか。有名詩人という肩書きに釣られて集まっただけなのではないか。朗読会の聴衆に向かって、語り手は最後に問い掛ける (Tell me, you people out there, what is poetry anyway?)。大衆にとって、もはや詩の内容などどうでも良いのだ。朗読会によって大衆化されたアメリカ詩への批判。米国桂冠詩人を務めたストランドの詩を、果たしてどれほど多くの人理解できるのだろうか。ここに書かれた大詩人というのは、ストランド自身の姿を茶化しているようにも思える。

次に、“Five Dogs” (35-39) について考えて見る。この詩は、文字通り5匹の犬を扱った連作だ。その第1部を見てみよう。季節は、晩秋。犬のスポットは「深夜の谷」(the midnight valley) にいて、そこから夜空を見上げる。夜空一面に星が広がり、まるで花畑のように輝いている (the great starfields / Flash and flower)。犬のスポットは、「詩人の丘」(the poets' hill) を目指して登る途中に、この星空を見て、心奪われる。その瞬間、感動が込み上げ歌い始めた (That's when I, the dog they call Spot, began to sing)。溢れ出る感動を歌(詩)にして、表現したい。その気持ちを押しさえ切れなかったのだ。

“Five Dogs” の最後を飾る第5部では、語り手が、5匹目の犬について語る。1匹目のスポットと違い、名前と呼ばれることはない。自らが一人称で語ることもない。かつては詩人だった犬なのに、今や詩を歌えなくなっている。この犬に備わっていた詩的靈感は失われ、光は消える。

この犬の天職は、全身で歌を表現することだった (the song of his body was all of his calling)。彼は歌い手、つまり詩人なのだ。それなのに歌えなくなってしまった。何年もの間、全身全霊を尽くして歌ってきた。すべて彼の「呼びかけ」であり、心の「叫び」だった。それが天職だと信じていた。しかし今や呼びかけることも、叫ぶこともできなくなった。歌声が枯れて出なくなった。歌で表現して、人の心に訴えかける力がなくなった。だから電話でもして、せめて家族だけには「呼びかけ」ようとした (here was a dog in a phone booth / Calling home)。1対1の電話でなら、家族に呼びかけられるのではと、微かな期待を抱いての行動だった。だがそんなことをしても、なんの気休めにもならない。彼の病んだ心を癒すことはできない (nothing would ease his tiny heart)。彼はそれを承知の上で、敢えて取った行動なのだ。

心細くなった犬が、家に電話をかける。だが「誰も家にいなかった」(No one was home)。

どこに行ったのか分からない。「電話は鳴り続けていた」(The phone kept ringing)。誰も電話を取らない。それでも彼は、電話を切らずに呼び続けている。自分の声が家族にさえ伝わらない。ましてや、人々の心に訴えることなど、とてもできない。

以前は、「願いの賛歌」(願いを称える歌)や「至福の歌」を歌っていた。だがもうその歌を二度と歌うことはないだろう(Those hymns to desire, songs of bliss / Would never return)。一体彼に何があったのかは分からない。情熱がほとぼしることがなくなったのか。あっても感情表現ができなくなったのか。そういう定めなのかもしれない。とにかく、詩の女神が振り向かなくなり、詩的靈感が枯れてしまった。もう歌う力が消えてしまったのだ。

前述したように“The Disquieting Muses”では、詩の女神が人々に詩の魂を伝えることができず、疲労しきっている。人々は詩(心)を解そうとはせず、ミューズの言葉に耳を傾けない。人々の心から詩が離れてしまっている。そして“Five Dogs”第1部で、詩を解し、詩的感動を表すのは、人間ではなく、犬のスポットだ。人間界における詩の不在。これを表すために、人間ではなく犬のスポットに語らせているのだ。⁴

詩人の丘に登る人は、かつてはいたのかもしれない。しかし今では途絶えてしまい、あえて登ろうとするものはない。今は犬のスポットくらいのものだ。詩人の丘とは、詩の世界、詩的感動が味わえる空間ということだ。そして最後には、第5部で見たように、その犬でさえ詩が歌えなくなるのだ。世の中から詩が姿を消してしまう。詩人にとって、絶望的な状況だ。詩の女神が絶望していた状況は、キリコの絵だけの話しに留まらない。ストランドの詩集の世界にまで、不吉な影が忍び寄っているのだ(darkness would pass / Into the world)。

4. 日 没

“The Next Time”の最終第Ⅲ部(9)で、語り手は目の前の日没を見て、人生を振り返る。希望や理想があるのに対して、思い通りにならなかった現実がある。詩人としての人生を振り返ったときも、自作への不満が残る。それはまた、書くことへのこだわりであり、理想を追い求める姿の裏返しでもある。このような過去を修正したいなどと、始めから望んでいた訳ではない(Hoping to revise what has been false or rendered unreadable / Is not what we wanted.)。

実現し得なかった過去の姿が、西に沈む夕陽に例えられる(the intended story / Would have been like a day in the west)。理想とする日没の景色では、現実と違って、一日の疲れなどは存在しない(everything / Is tirelessly present)。山の影が長く伸び、谷まで及ぶ(the mountains casting their long shadow / Over the valley)。谷では風がくるくると舞い、歌声を上げる(the wind sings its circular tune)。楽しそうな光景だ。風の歌声に合わせるかのように、木の葉が手拍子を打つ。木々は、手拍子に応える(trees respond with a dry clapping of leaves)。自然の中の交流。夕日、谷、風、葉、木、すべてが一体となって日没の景色を作り、音楽を奏でる。自然界の調和が見られる。一種の理想だ。

だが、あくまでも理想であって、現実異なる。そのことは詩人自身がよく知っている (overly / Simple no doubt)。それは近視的な見方 (short-sighted)。もうすぐ葉は枯れて散る。今見ている森の様子は、葉が落ちれば変わってしまう。葉擦れの音もなくなるだろう。そしてすべてを「無効にする雪」(the annulling snow) が降れば、自然界を真っ白に覆い尽くし、目の前の景色は一転してしまう。

今、私たちにできることとは何か。過去を後悔するだけでなく、誤った過去を償い、もう一度新しい出発を願うこと (desire to make amends / And start again)。沈み行く太陽が、まるで私たちに憐れんでいるように見える (the sun's compassion as it disappears)。消え行く夕陽から慰めを感じ取り、出直したいと願う気持ちになっている。

最後に、同じく日没を扱った詩，“The View” (55) を見てみよう。これは、詩集の最後を飾り、全体を締めくくっている。ここでの人物もまた、日没の景色に魅せられている。夕陽が見えるこの場所が、お気に入りなのだ (This is the place)。ただ単に夕焼けが見えれば良いというのではない。幾つかの条件が揃った時の眺めなのだ。

風が吹く。辺りの空気を何回も掻き回し、淀んだ空気に流れが起きる (The wind moves the air around, repeatedly)。まるで「僕のための空間」を空けてくれるかのようだ、と彼は思う (“A space for me,” he thinks)。あくまでも、彼の視点から見た眺めだ。ここで吹いている風も、彼のお気に入りであり、この空間を作る要素となっている。他の人々と共有する空間ではない。彼個人が楽しみ、くつろげる私的な空間なのだ。風がその重要な演出をする。彼の他に、人の気配はない。誰かいたとしても、この景色に特に何の思いも抱かずに時を過ごしているだけなのかもしれない。そのような人々への批判とか警告めいたものはない。

彼はこれまでも、このような眺めに心引かれてきた。その眺めのことを「別れの天気」(the weather of leavetaking) と呼ぶ。時の流れの中で刻々と変化し、そして最後に別れを告げる天気。ここでは、一日の終わりを告げる夕焼けがそうだ。

He's always been drawn to the weather of leavetaking,
Arranging itself so that grief — even the most intimate —
Might be read from a distance.

日没の景色が、見る人に「悲しみ」(grief) を感じ取ってもらおうと、意図的に準備を整える (Arranging itself)。景色が自らメッセージを送っている、とする解釈だ。景色を見た人すべてが、悲しみを読み取ってくれるとは限らない。だが彼には分かる。夕焼け空を見て物悲しく思うのは、見る人の感受性だけの問題ではないと。夕焼けそのものが、物悲しさを感じさせようと、見る人に働きかけているのだ。

彼は、レストランのような所において、外の夕焼けを眺めている。彼が注文した飲み物を「ウエイトレスが持ってくる」(The waitress brings his drink)。グラスを手に持って、夕陽にかざ

す (he holds / Against the waning light)。夕日の輝きは徐々に弱まってきている。「赤い夕映えが彼のシャツを染める」 (Its red reflection tints his shirt)。絵になるような一瞬の (just for a moment) 光景だ。夕日が消え行く前に、一瞬放つ最後の輝きなのだろう。この後、太陽が沈み、「空はゆっくりと暗くなる」 (Slowly the sky becomes darker)。その時、「風が和らぎ、眺めが昇華する」 (The wind relents, the view sublimates)。景色の緊張感が高まり、崇高なまでの気配を帯びる。詩の山場である。日が沈んで行く。空は赤から「紫」に変わる。詩集の最後は、次のように結ばれている。

The wind relents, the view sublimates. The violet sweep of it
Seems, in this effortless nightfall, more than a reason
For being there, for seeing it, seems itself a kind
Of happiness, as if that plain fact were enough and would last.

夕焼け空が暗くなってきて、「一面の紫色」が広がる。この穏やかな夕暮れ (this effortless nightfall) では、身構えて感動する必要などない。力を抜いて臨むだけでいい。物悲しくも、ゆったりとした気持ちで、紫色に広がった空から伝わってくる。なぜそこにいて、この景色を眺めているのか。ただ「そこにいて、見ていたいから」 (For being there, for seeing it) という極めて単純な理由なのだ。それ以上の意味もあるのかもしれない (more than a reason)。だが、ただこれだけの理由だということも、明白な事実なのだ (that plain fact)。

神秘的な要素を秘めた光景であり、その辺をストランド自身も感じ取ってはいる。だがそこで、宗教問題に入らず、風景を見た感動として止めるのが、ストランドの特徴。「ある種の幸せのようだ」 (a kind / Of happiness) と率直にこの感動を味わう。そこから先の宗教や哲学の世界へは足を踏み込まない。⁵ 詩的空間を感じ取り、それを言葉で描く。たった一人だけが味わえる夕焼けの空間。この一瞬、この空間において、彼の心は満たされ、崇高な気持ちになっている。⁶ ストランド詩に類出する「不在」の問題は、この一瞬だけは存在しない。

結 び

ストランドの詩は、意外な結末で終わることがある。⁷ 例えば、“Precious Little”では、自然の音楽を奏でる風を称えていたかと思うと、突然その風に疑問を抱く。本当は風の音ではなく、闇の一步手前を走る人の音ではないのかと。読者が普段気付かない点について、予想外の角度から問題を突き付ける。そのように、ストランドの詩が、例えば“A Piece of the Storm”での一片の雪のように、読者の心に不意に舞い降りてくる。そして何気なく、読者に問題の所在を気付かせる。人生の意義などについて問い詰め、問題提起する。彼の詩は、そのきっかけを与えようとする。

そもそも、ストランドの詩から読者に向けて、明確なメッセージがあるのかどうかは疑問で

ある。だが、詩人の声のある程度読み取ることは、可能である。 *Blizzard of One* では、例えば “The Delirium Waltz” (46-54) のように、多くの人や時間が過ぎ去り、消えて行く。未来への明かりは、なかなか見えない。一瞬だけ見えたかに思えても、すぐに消え去る。夕方から闇、秋から冬に向かう詩が多い。また、吹雪を予感させる雪など、不安材料が多い。しかし決して嘆いてばかりいるのではない。一瞬だけ慰めを感じ取る時がある。この瞬間を感じ取れば、混沌とした無秩序で断片的な世界は、たとえ一瞬でも調和される。先ほどの “The View” で見たように、景色が昇華する一瞬がそうだ。だからと言って、ストランドはその瞬間を目標に置き、そこへの到達を目指そうなどとはしない。霊的な探究を行うが、救いは示さない (Lund 19)。ほんの一瞬でも、慰められる時が見つければ、それで満足なのだ。

この詩集の世界で、嵐や吹雪は実際には起きない。だが、不吉な予感が付きまとう。風が吹き、闇が迫る。強風にもなり得る風が、詩の中で頻繁に吹いている。確かに、自然の音楽を奏でる風も吹いている。だがその風は、すぐにかき消されてしまう。ブリザードが起きるかもしれないという不安が、この詩集には絶えず漂っているのだ。それは、世紀末に発表した詩集だからなのか。それとも、現代と言う時代への不安の表れなのか。今すぐ起こる嵐ではないにしろ、近い将来に起こり得るとストランドは言っているようだ。つまり、 *Blizzard of One* の世界そのものが、そんな猛吹雪の前兆となっているのである。

- 注 1. Mark Strand, *Blizzard of One: Poems* (New York: Knopf, 1998), 20. *Blizzard of One* からの引用はすべてこのテキストに拠る。ページ数は、タイトルの後の () 内に記すことにする。
2. ストランド詩についての研究は、まだ十分とは言えない。単独に扱った研究書では、David Kirby, *Mark Strand and the Poet's Place in Contemporary Culture* (1990), 1点のみである。後はジャーナルに発表された論文、そして新刊本についての書評があるくらいで、いずれの数もそう多くない。ちなみに日本では、以下のような簡単な紹介と翻訳が、わずかにある程度である。
- 新倉俊一『アメリカ詩入門』(研究社, 1993), 138-141。
 マーク・ストランド著、村上春樹訳『犬の人生』(中央公論社, 1998)。
 D.W.ライト編、沢崎順之助、他訳『アメリカ現代詩101人集』(思潮社, 1999), 376-377。
3. 題材の絵は、キリコが1925年に発表したもの(国立ローマ現代美術館所蔵)。ストランドが、アイオワ大学美術館の依頼を受けて、詩に書いた。同詩集に連作として入っているもう一篇、“The Philosopher's Conquest” (28) も、同じくキリコの絵で、1914年の作。こちらは、シカゴ美術館に展示されている。同美術館が、シカゴ在住のストランドに詩作を依頼したもの。この辺の事情は、*Blizzard of One* の出版元、ランダムハウス社のホームページに、ストランドへのインタビューとして公開されている。Ernie Hilbert, “Interview: Conversation with Mark Strand,” *Bold Type*. 26 July 2000 <<http://www.randomhouse.com/boldtype/0200/strand/interview.html>>.
4. 犬のスポットとは、自分のことだとストランドは言っている。“...the first dog, Spot, is me...Spot is a Mark, a mark is a spot.” (Hilbert)
5. ストランドの詩は、禁欲的なまでに、宗教の世界には足を踏み入れない。最近出版された評論集の中で、ストランドは自分のことをこう言っている。“...because I am not a Christian or a fortune teller, I cannot say what is beyond me.” (*The Weather of Words* 60)
6. ストランド詩のペルソナは、自分を救う方法を考え出そうとする (Kirby 6)。
7. ストランドの詩は、超現実主義的だと評される (Parini 525)。その理由の一つは、意外で不気味な終わり方をして、現実世界の中の非日常性を描くからだ。

引用文献

- Garrison, Deborah. "The Universe Stares Back: The poet Mark Strand confronts the infinite, which sometimes returns his gaze." Rev. of *Blizzard of One* by Mark Strand. *The New York Times Book Review* 13 Sep. 1998: 30.
- Hilbert, Ernie. "Interview: Conversation with Mark Strand." *Bold Type*. 26 July 2000
<<http://www.randomhouse.com/boldtype/0200/strand/interview.html>> .
- Kirby, David. *Mark Strand and the Poet's Place in Contemporary Culture*. Columbia: U of Missouri P, 1990.
- Lund, Elizabeth. "A Cleareyed Poet's Searching Questions: Mark Strand wonders where we're going." Rev. of *Blizzard of One* by Mark Strand. *The Christian Science Monitor* 22 Apr. 1999: 19.
- 新倉俊一 『アメリカ詩入門』, 研究社, 1993。
- Parini, Jay. "Mark Strand." *The Oxford Companion to Twentieth-Century Poetry*. Ed. Ian Hamilton. Oxford: Oxford UP, 1994.
- Strand, Mark. *Blizzard of One: Poems*. New York: Knopf, 1998.
- . *The Weather of Words: Poetic Invention*. New York: Knopf, 2000.
- マーク・ストランド著, 村上春樹訳 『犬の人生』, 中央公論社, 1998。
- D. W. ライト編, 沢崎順之助, 他訳 『アメリカ現代詩101人集』, 思潮社, 1999。

Mark Strand's *Blizzard of One*: Will a Blizzard Blow Up?

NAKAMURA, Atsushi

Abstract

In 1998 Mark Strand published a new book of poems titled *Blizzard of One*. What does this title mean? Will a blizzard really blow up in these poems? Keeping these questions in mind, this paper will attempt interpretation of four groups of poems. First, two poems on extinction: "A Piece of the Storm" and "The Night, The Porch." Second, "Precious Little": a poem about the wind, which is frequently blowing in these poems. Third, three poems on poets: "The Disquieting Muses," "The Great Poet Returns," and "Five Dogs." And finally, two poems on sunset: "The Next Time" III and "The View." Through interpretation the following conclusion has been reached: no blizzard rages in the world of the poems, however, there lurk fears that it might blow up at any moment. In short, the world of *Blizzard of One* foreshadows a blizzard.

keywords: extinction, the wind, darkness, sunset, poets

(なかむら あつし 本学人文学部助教授 アメリカ文学専攻)